

鈴木重三・木村八重子・中野三敏・肥田皓三編『近
世子ども絵本集江戸編・上方編』

園田, 豊
北九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/12000>

出版情報：語文研究. 60, pp.64-65, 1985-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

△ 紹介 △

鈴木重三・木村八重子編 『近世子どもの絵本集 江戸篇・上方篇』
中野三敏・肥田皓三

園 田 豊

このたびの本書の刊行により、従来「雑本」として顧られることの少なかった近世子ども向け絵本類が、刊行当時に勝るとも劣らぬほどの美しい姿で複製され、さらに懇切丁寧な翻字、語注、絵注を付されて一挙にその全貌を我々の前にほぼ現わすにいたった。特に上方篇収載の諸本は、数年前愛知県松阪市射和寺の地藏胎内より出現、岡本勝氏によって「近世上方子供絵本集」(角川書店・昭57)に紹介された小本型四書を除けば、その多くが個人蔵書であるという事情もあり、複製は今回が初めての作品ばかりである。さらに、これらの諸書によって「上方に子ども絵本なし」の旧説は雲散霧消し、替って新たに「子ども絵本の濫觴は上方にあり」との説が可能に帯びてくる。それほどに本書が近世文学研究史上に占める位置には重要なものがある。

以下、やや冗慢に流れ恐縮ではあるが、各篇の目次を記して本書の内容紹介とさせていたたく。

まず、江戸篇には寛文年間(一六六一〜七三)に発興したとされる赤小本のうち、「初春のいわひ」(延宝六年刊)、「むちなな敵討」の二作に始まり、寛延から安永年間(一七四八〜八〇)にかけて刊

行された赤本、黒本、青本といった中本型の草双紙中、子供向けの内容をもつ作品群を、①昔話もの(「したきれ雀」「さるかに合戦」等)、②御伽草紙・説話もの(「らいこう山人」「はちかつきひめ」等)、③祝儀もの(「鼠のよめ入り」「化物よめ入り」等)、④異類合戦もの(「魚鳥合戦」等)、⑤奇想もの(「豆右衛門」「おにの四季あそび」等)、⑥戯曲もの(「ねずみ文七」「大友真鳥」等)、⑦歌謡もの(「万ざい」「赤本うたひづくし」等)、⑧遊戯本(「めつけゑ」「新なぞつくし」等)、⑨教化もの(「寺子短歌」「武者づくし」等)の九種に分類している。さらに従来大人の読者のみを対象としたと考えられがちな黄表紙、合巻、豆本仕立ての作品中からも子ども向け内容のものを採り上げるといった目配りもなされており、計五十三点を収録する。

ついで上方篇には、(初期子ども絵本)として先述した小本一冊の型をとり、寛文年間の上方版と目される「弁慶誕生記」「おぐり判官てるて物語」「せん三つはなし」「天狗そろへ」の四書に加え、中本型という過渡期的形態をとり、天和、貞享期(一六八一〜八八)の刊行と推定される「四天王揃」のあわせて五点を収録し、さらにそ

れ以降、すなわち正徳、享保頃（一七一〜一七三五）、より幕末にいたる迄、上方子ども絵本の基本型をなす半紙本一冊型の作品群を（中期以後子ども絵本）として、①民話・昔話（舌切り雀をベースとした「今昔雀表記」「金太郎」「桃太郎」等）、②当世風物語（「風流邯鄲枕」等）、③祝儀もの（「絵本福神子供遊」「祝言富貴鼠」等）、④化物（「化物天目山」「ねこまた退治」等）、⑤異類合戦（「和漢鼠合戦」「諸鳥比翼争」等）、⑥歴史物語（「聖徳太子の守屋討ち」「太閤記」等）、⑦武者絵本（「絵本御代駒」「女武者」等）、⑧子ども遊び（「おきな遊び」等）、⑨尽しの絵本（「まる尽し」「生類狩人尽し」等）、⑩言葉あそび（「絵本御伽帳」「御伽新二重謎」等）、⑪雑（「懐胎誕生楽」「子ども往来」等）の十一種に分類、計五十九点を収録する。また各篇巻末には収載書目の書誌、所蔵者、内容についての解説が備わり、さらに解説として、鈴木重三「江戸時代「絵本」の鳥瞰―絵入り版本各種の紹介を主に―」・木村八重子「赤本の世界」（以上「江戸篇」）、中野三敏「上方子ども絵本の概観」・肥田皓三「近世子ども生活と遊び―西川祐信の二つの絵本にみる―」（以上「上方篇」）の四論考が載る。いずれも近世の子ども絵本に関する興味深く示唆に富むものであるが、紙数の都合上、そのすべてについて述べるのは差し控えることとして、ここでは本書全体の解説ともいべき中野氏の論考に触れておきたい。この中で氏は上方子ども絵本を、その沿革、内容、書誌的特徴の面から江戸のものと比較対照させつつ、その特質、文学史における位相を余すところなく明確に記述しておられる。

この様な解説と四百点にもぼる「上方子ども絵本現存リスト」を備えた本書は、近世文学中に埋没していた子ども絵本を見事な形

で発掘、再現してみせた、と同時に、その存在をいっきに学問研究レベルまで止揚したものとしてみれば、今後さらに高い評価を与えられることになろう。

以上、本書の真価の十分の一も満足に紹介し得ない浅学非才を恥じつつ筆をおくこととする。

最後となつてしまつたが、拙稿執筆の過程で本書が日本児童文学会賞、毎日出版文化賞を相ついで受賞したとの朗報がもたらされた。心よりお慶び申し上げる次第である。

（昭和六十年七月 岩波書店 江戸篇五一九頁・上方篇五三二頁）
二分冊合計二九〇〇〇頁